

ない。

事務局を引受けて

米林富男

戦後の村落研究のめざましい発展は、占領下C・E・Iの刺戟はあつたとはいえ、何といつても村落研究会のメンバー達の功績といわねばならない。特に戦前はあまり頗れなかつた漁村の研究が活発になつたことは、戦後の村落研究のひとつ特色ではなかろうか。そしてこれらの研究が、農地改革や町村合併などのような戦後村落の実践的な課題と結びついてすゝめられていることも特色であろう。したがつて、これらの研究は社会教育活動や新生活運動にも貢献するところはすくなくない。だが、村落研究がこうした方向をすゝむにつれて、国外の村落研究や農村問題にも眼を向ける必要があるのではないか。こうした国際的視野に立つてこそ、はじめて從来の日本の村落研究は一層その精彩をはなつことになるのではなかろうか。

昭和十年ごろ、いまは故人となつた及川宏君や北山正邦君達と、鈴木栄太郎先生のお供をして農村調査をはじめてから、はや四半世紀がすぎた。その間に長い戦争がつゞいて、日本農村の実証的研究におおきな障害となつたけれども、有賀喜左衛門氏や喜多野清一氏らの努力で、この地味な骨の折れる研究はつけられ、他の学問分野の農村研究とも連絡がとれるようになつて、すくなくとも日本の社会学の分野では、家族・村落の研究だけは他の研究にくらべてすぐれた業績をのこしていいる。昭和十三、四年頃社会学関係者だけで実證的な研究をあつめた「家族と村落」を出版した当時をかえり見てまことに感慨にたえ

あらたに鈴木栄太郎教授をむかえて東洋大学に社会学部が設けられた機会に、村落研究会のお世話を引受けることになつたのも深い因縁であろう。たゞ設立日の浅い学部内の整備に忙しい私達に、この光榮ある任務を充分にはたしめるかどうか、はなはだ自信がないことに、この大学の社会学部での仕事を担当することが、他の学問分野との連絡に円滑を欠くことのないよう自戒するとともに、特にこの点について会員諸賢の御協力をおねがいしたいと思う。